

東公民館

永田 盆行事二〇八灯

永田区長 小笠原 盈喜

8月13日(月)、永田共
同墓地内の華蔵庵前広場に夕
闇せまる午後7時半すぎ、平
素真つ暗闇のこの地が年に一
度この時だけは、煌煌と灯明
に映し出されて、大勢の方々
が墓参に集まります。自宅玄
関前でご先祖さまの霊をお迎
えする迎え火の麻木を燃やし、
お墓にローソクや線香を持っ
て家族総出でまいります。墓
地には子どもたちがともす一
〇八ツの灯明が人々を迎え、
ご先祖さまとそろってお家に
帰る足元を明るく照らすお盆
の行事です。

昭和15〜16年ごろまでは
催されていたようですが、さ
きの大戦で中断され、昭和
57年8月13日、40年余りの
眠りから目覚めてより今日ま
で子どもたちが守ってまいり
ました。
素焼きの皿に菜種油をそそ
ぎ入れた灯芯の一つひとつ灯
をともししていく、その真剣な
眼差し、えも言われぬいい顔は、
常日頃の子どもの顔とは
違った顔に見えます。今行っ

ている行事に対する認識によ
るものか、ご先祖さまを偲ん
でいるように見え、静かに
灯火を見つめ、灯を消さない
よう見守っています。

赤い帽子の六地藏さん、古
い時代の仏像などが祭られて
いる華蔵庵の内もあかあかと
灯明に照らされ、お盆らしい
雰囲気の内もあかあかと
霧囲気の漂うなか、燃焼し残
った油を一か所に集め、携わ
った方々が広く輪になりその
真ん中で一度に燃焼させます。
その火柱は数メートルの高さ
になり、参加者の大歓声が一
〇八灯の終りを告げます。そ
の火が消えると、ついさき程
まで各々のお墓にともって



▲お盆独特の雰囲気にもまれて…

▼秀作の数々



たローソクの火も消え、墓地
はいつもの暗闇の世界に戻っ
ていきます。

それと並行し、隣接する公
民館では同じ年に初めて開催
されたミニ文化祭が催されて
います。保育所に通う幼児か
ら高齢者にいたる広範囲の
方々が趣味などで精魂込めた
立派な作品が展示され、館内
はにぎわっています。作品の
前で作者と作品について苦労
話などに花が咲いている姿が
多く見られました。
一〇八灯も文化祭もともに
住民がそれぞれの考えを集め
その内容も年々進化している
ことがハッキリと伺え、いろ
いろ手伝わっている分館役員も
心地良い疲れを覚えます。ま
た来年にと発展を誓いつつ、
行事を終えました。

補導センターだより

「はれの日」「けの日」

岡田小学校生徒指導主事 大津 達也

10月25日、わたしの生ま
れ育った町の秋祭りの日。
この日は、わたしにとつて
1年の中で最大のイベントの
日です。みこしに五ツ鹿踊り
相撲練りなど…。村祭りの要
素が根強く残っている秋祭り
なかでも、若い衆がふんどし
姿でかいて暴れ回る牛鬼は、
あこがれの的でした。「いつ
か自分も大人になれば、あの
牛鬼をかくんだ。」と胸をわ
くわくとさせたものです。

秋祭りの1か月前になると、
毎年わたしは自分の部屋の壁
に自作のカレンダーを張り、
「秋祭りまで後〇日」と指お
り数えたものでした。
過疎の町ですが、この秋祭
りの日には、地域住民がいか
所に集い、にぎわいます。お
昼になれば、家々には、1年
に一度のぜいたくとばかりに
ごちそうが並びます。そして、
道行く方に「あがつていかん
か。」と声をかけ、声をかけ
られた方も遠慮なくごちそう
になる。そんな一日です。

以前、ある講演会で「はれ
の日」「けの日」という言葉
を耳にしたことがあります。
難しい話によく覚えていませ
んが、簡単に言うと、人間には、
特別な日と普通の日のどちら
も必要であり、そのバランス
が大切であるということです。
なるほど、毎日がイベント
の連続であれば、疲れ果てて
しまいます。また、毎日が普
通の日であれば、楽しみは少
なくなるでしょう。

さて、わたしたちの生活を
振り返ってみましょう。家庭で、
学校で、地域で、それぞれ
「はれの日」「けの日」はあ
りますか？また、その balan
スは十分にとれていますか？
物があふれる時代だからこそ
なおさら、そのバランスが大
切なのではないでしょうか。
そのバランスがとれていれば、
「はれの日」に向かつての一
体感が生まれ、好ましい人間
関係ができるのみならず、一
人ひとりの心のバランスがと
れるのではないのでしょうか。